

そち

「帥大伴卿が歌」

↳歌に託す望郷の念

・万葉集には、旅にでて故郷を思う歌が多くみられるが、当時、地方への赴任を余儀なくされた官人たちの中で、最も多くの望郷歌が詠まれたのは大伴旅人、山上憶良らが今の福岡市の東南十六キロ離れた地にあった九州・杵岐・対馬を治め、外交・国防などのため筑前の国におかれた地方行政機関であった大宰府（現・福岡県太宰府市）などに中央から派遣された諸官人たちが遠く離れた都への思いをうたいあげている。

・なかでも大宰府帥（長官）^{そち}・大伴旅人の歌には故郷を思う切実な思いが詠われている歌がある。この歌は大伴旅人が奈良の都に帰ることになる天平二年（七三〇）の前年、天平元年（七二九）三月下旬から四月始めのころと推定されている大宰府での宴で部下の防人司祐大伴四綱^{よきもりつかさのすけ}から次の歌で問いかけられた。

ふじなみ

○藤波の花は盛りに なりにけり 平城の京を思

な ら みやこ

ほすや君

卷三―三三〇 作者・大伴四綱

（解説）ここ大宰府では藤の花が真っ盛りになりました。奈良の都（平城の京は原文）を懐かしく思われますか、あなたさまも。この「あなたさま」

は旅人を指すものと云う。・奈良の都は原文では「平城京」とある。

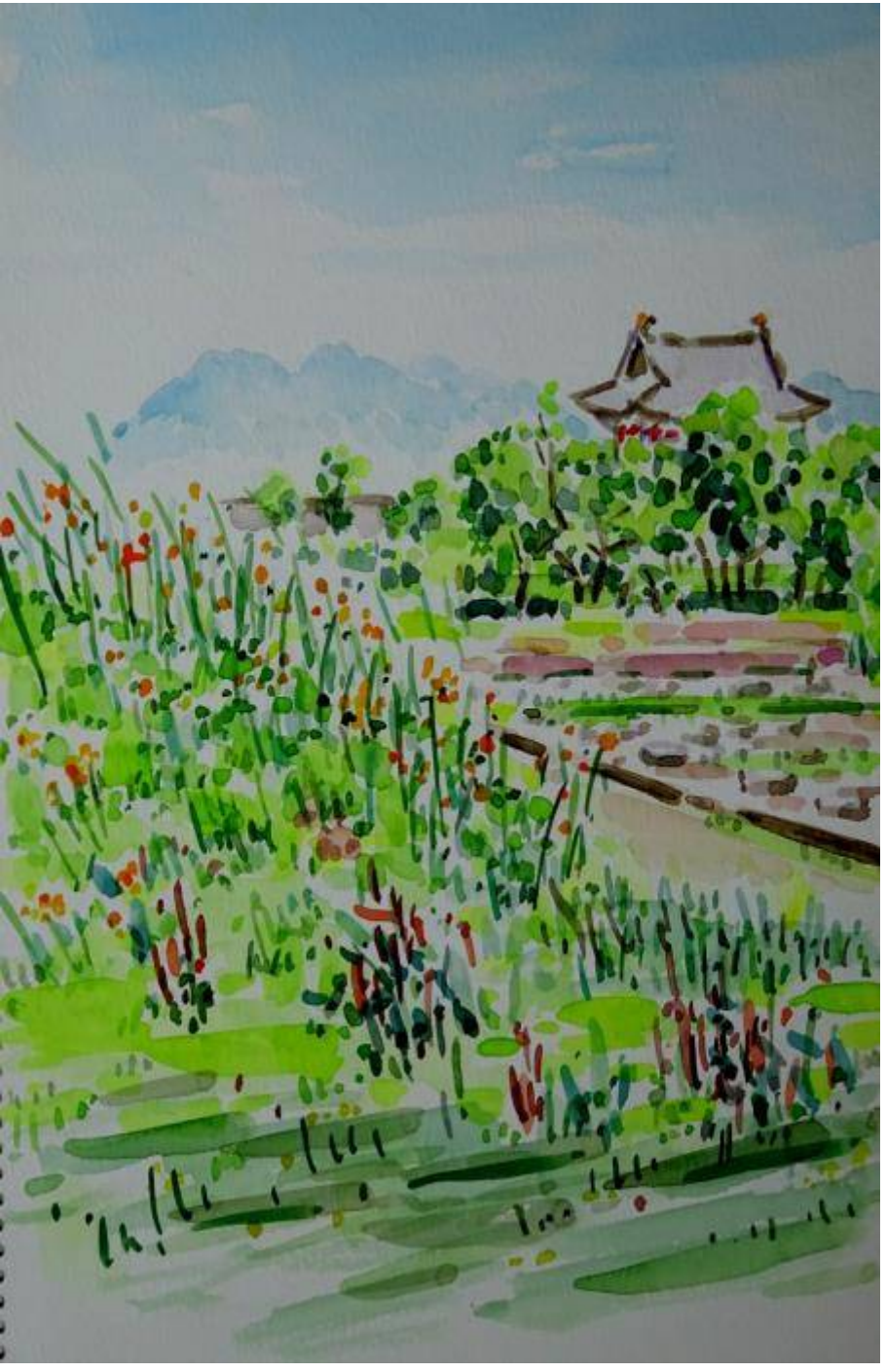
○この大伴四綱の問いかけに次の歌で答えている。

1) 我^わが盛り またきちめやも ほとほとに 奈良の
都^{みやこ}を見ずかなりなむ 卷三―331旅人

(解説) 私の若き盛りの時代がまたかえってくるだろうか、いやそんなことは考えられない。ひよつとして、奈良の都を見ないままに終わってしまうのではあるまいか。

(写生地) 平城京は和銅三年(七一〇)三月に藤原京から遷り、延暦三年(七八四)の十一月に長岡京に遷るまで古代日本の都として存在した。

・復元した平城京入口にあった朱雀門などの平城京跡を描く。(杏花)



・この旅人の歌によって四綱の歌(卷三―330)に答え終わった。

○旅人は次の歌から四首、自分が生まれ育った藤原京における香具山のあたりの「明日香」と天武天皇・持統天皇がたびたび訪れた奈良県吉野町

宮滝にあったと伝承される離宮への行幸にもいくたびか従ったことから旅人の真実の望郷は、吉野・明日香だったのであるだろうと思われる次の四首（吉野・明日香各二首）が詠われている。

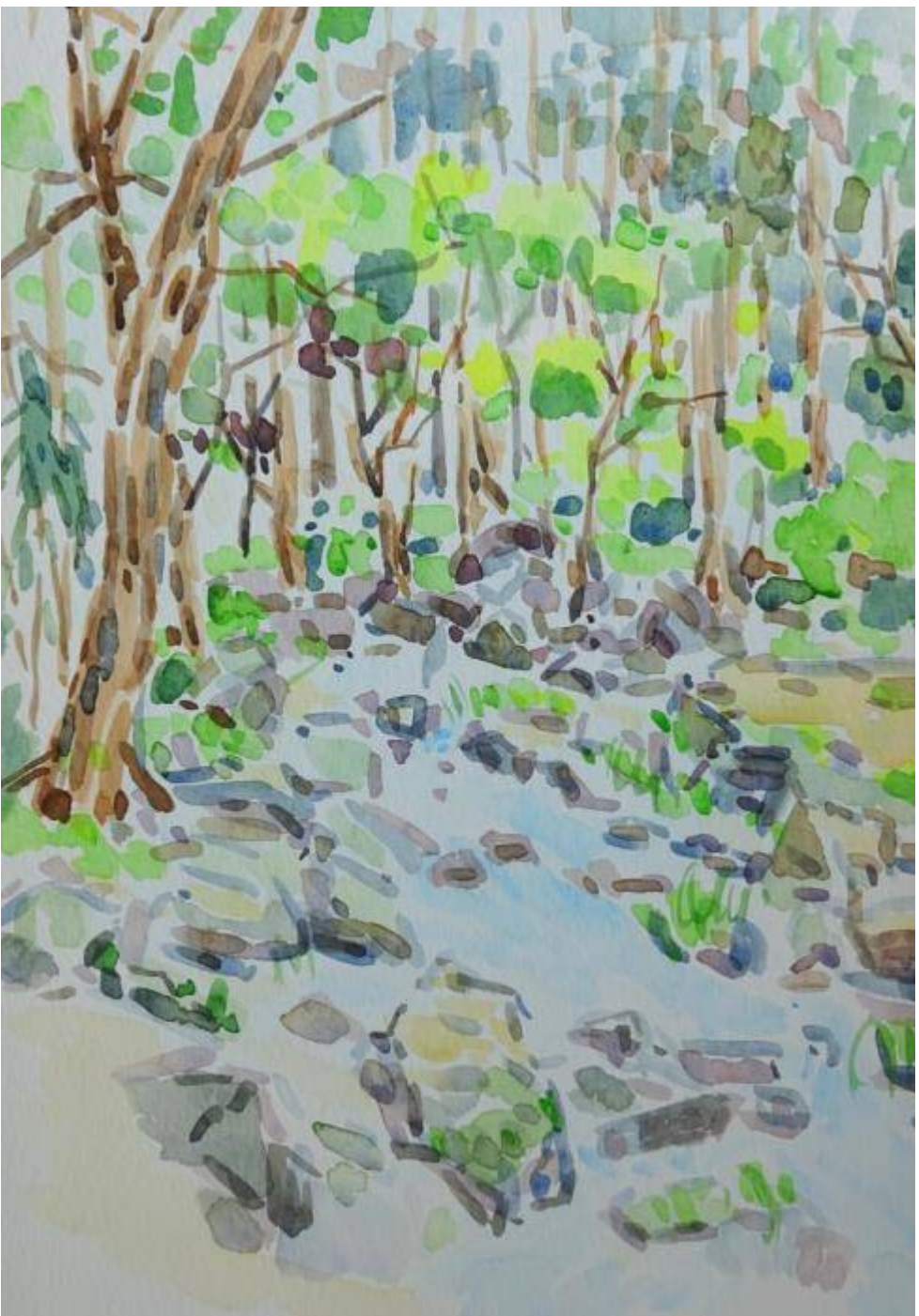
2) 我が命も 常にあらぬか 昔見し 象の小川を 行ゆ

きて見むため（吉野）

卷三—332

（解説）私の命はいつまでもあってくれないものか。昔見た象の小川、あの清らかな流れを、もう一度行って見るために。

（写生地）象の小川は奈良県吉野山に源を発し吉野郡吉野町喜佐谷の里を流れ吉野離宮伝承の地である吉野宮滝の傍を流れる吉野川に注ぎ込む。喜佐谷の里付近の杉の美林の間を流れる象の小川を描く（杏花）



あさちほら

ものも

ふ

3) 浅茅原 つばらつばらに 物思へば 古りに

し里し 思ほゆるかも(明日香) 卷三—333

(解説) つらつらと物思いにふけっていると、あの若き日を過ぎたふる

さとの明日香がしみじみと思い出される。・「浅茅原」とは丈の低い茅萱ちかや

(いね科) の生えた原、生まれ育った明日香の地の原を指すと思われる。

わすれくさ

ひも

かぐやま

ふ

4) 萱草 我が紐に付く 香具山の 古りにし

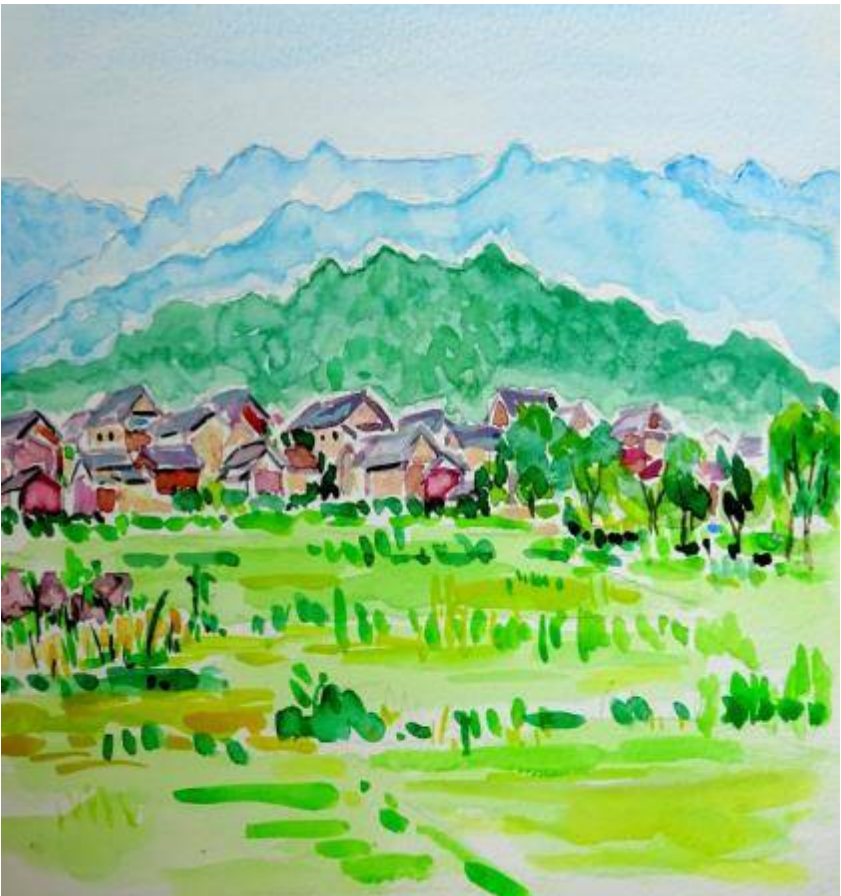
里を 忘れむがため(明日香) 卷三—334

(解説) 萱草を私の下紐に付けました。香具山のあの故郷・明日香の里を、

いつそのこと忘れてしまうために。「わすれくさは忘草・忘種とも書く」

「萱草」とは身につけると憂さを忘れると考えられていたところからの名

(写生地) 藤原宮跡から天の香具山を描く(杏花)



5) 我が行きは ゆ 久にあらじ ひや 夢のわだ いめ 瀬にはならず せ

て 淵ふちにしありこそ (吉野) 卷三—335

(解説) 私の筑紫在住はそんなに長くはないだろう。あの吉野の、夢のわだよ、浅瀬なんかにならずに、深い淵のままであっておくれよ。

・「夢のわだ」は吉野の宮滝にある大岩に堰(せ)かれた淵の名で卷三—332に詠われている象の小川の水が吉野川に流れ落ちる場所と言われている。

(参考文献)

伊藤博著「萬葉集釈注」、澤瀉久孝著「萬葉集注釈」他